



Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学校教育における合唱指導理論の構築：声の相似現象に見る模倣行動を起点として(全文の要約)
Author(s)	戸谷,登貴子
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	http://hdl.handle.net/2309/149517
Publisher	
Rights	

博士論文要約

氏名：戸谷登貴子

題目：学校教育における合唱指導理論の構築

— 一声の相似現象に見る模倣行動を起点として —

[要旨]

我が国の学校教育において、合唱は大変盛んに行われている。授業内外の合唱活動は、学校文化を成しているとも言える。しかしその合唱は、戦後の学校教育で確立した独特のスタイル、方法によって実践されており、社会における芸術文化としての合唱とは、一線を画すものである。その状況には、授業の合唱の在り方が大きく関わっていると考えられる。合唱を音楽活動として捉え、「音楽としての学び」を成立させるためには、獲得しなければならない技能や学習すべき内容が、他の教科同様に存在する。しかし学習指導要領には、合唱の具体的な学習内容が十分に記載されているとは言えない。関連する指導書や解説書においても指導理論は見当たらず、これまでずっと現場教師の経験や勘に頼ることで指導が行われてきた。

そこで本論文は、小・中学校合わせた義務教育 9 年間での合唱授業に対し、授業の本質である「学び」が、何に主眼を置き、どのようなねらいで行われるべきなのか、合唱授業という集団学習の特質を考慮し、理論に裏付けられた実践からの指導法を提案していくことから、理論構築の必要性を考察し、学校現場に合唱授業の再考を示唆することを目的とした。

序章では、本論文の音楽教育における目的を述べると共に、合唱授業の問題点を、(1)歌い合わせることを中心とした合唱授業、(2)合唱授業における学びとは何か、の 2 点に据え、その背景を合唱教育の歴史、授業の問題点、教科の本質、学習システム、授業の特性、学校音楽の 6 つの視点から述べ、先行研究を基に現状の懸念と指摘から問題提議を行った。

第 1 章では、現行の学習指導要領で記載されている内容だけでは、合唱の習得が難しいことを論じた。現在の音楽授業の合唱学習に欠如している観点として、(1)音程感覚、(2)倍音、(3)聴感、(4)音楽構造の分析、の 4 項目を挙げ、合唱におけるそれぞれの能力育成の必要性を論じた。各項目では、系統的音楽教育システムであるハンガリーのコダーイ・メソッドを基に、日本の学校音楽教育ではどのように捉えられているかも合わせて概観した。

合唱は純正調の音程で作ることを基本とする。それが根底にあることで、唱法の選択は必然的なものとなるわけであり、合唱を歌うためには相対的な音程感覚が必要となる。音程には、前後の関係性（旋律的音程）と同時に響く 2 音の関係性（和声的音程）の 2 種類がある。合唱に必要なのは、この両方を歌え

る能力であり、この 2 種類の相対的な音を判断して歌える学習を行うべきである。しかし、この学習に関連する倍音の学習は、以前は教科書に掲載されていたものの、現行の教科書では削除され、音楽科において学習機会がなくなっているのではないかと危惧を抱く。このことから推察されるのは、我が国の音楽授業では、歌いながら聴くと言う行為を重視した学習が行われていないことである。それにも関わらず、『教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査』では、小・中学校教師の 8 割以上が、「聴くこと」を身につけて音楽活動を行ってほしい、という回答が出ている。この教師の意識と学習内容の矛盾を解明し、有効な学習指導の導入が必要である。

さらに、これらの能力を子どもたちが身につけるためには、発達段階を考慮する必要がある。そこで第 2 章では、特に身体的発達が影響する発声に関する項目を中心に、先行研究を基に指導の方向性を明確にした。合唱における発声は年齢を問わず重要な課題の一つであるが、とりわけ児童の発声指導は慎重に行われるべきであり、声域を考慮した教材選択や発声指導の明確な方向性など、教師の正しい解釈と指導技術が求められる。また、子ども達の音楽的知覚は、学習者の年齢や経験に依拠していることから、その発達段階に合わせた聴取スキルを養うことが重要である。

本研究の特徴は、歌唱学習の過程で共通にみられる「相似現象」を誘発する模倣行動に着目し、客観的に分析を試み、指導実践につなげた点である。合唱指導における声の相似は、有効・有用な指導法をもたらすために見逃せない重要な現象であると捉えた。そこで第 3 章では、この相似現象と学習の関わりを音楽教育領域のみならず、音響工学、教育心理学の領域からも分析し、そこから、学習の基礎と言える模倣行動が声の相似にも影響していることを明らかにした。研究プロセスは、まず模倣のメカニズムを明らかにし、音声生成の先行研究などを基にして、授業で起こる相似現象解明に向け仮説を立て、検証を行った。仮説は、(1)歌唱の相似現象に最も影響する要因は、音色が似ていることなのではないか、(2)集団歌唱においては、模倣学習することにより、母音、音高、時間経過、強弱の 4 つの要素で声収斂され、相似現象がおこるのではないかと設定し、その仮説を基に、授業の模倣学習場面を客観的に観察、歌唱学習の音声分析を行い、模倣学習の特性と声質の相似要因を明らかにした。その結果、相似の印象を与え最大の要因と考えられていた指導者と学習者の声の音色は、それほど似たものではなかった。むしろ、音高、さらには音価や音の立ち上がりであるフレーズの歌い出しの方が近似値であり、音声波形の似たものになっていた。また、集団歌唱の中では、学習過程で声収斂され、同期される。それには、音楽経験や音楽学習が深く関わっていることがわかった。このことは、歌唱学習における模倣学習の作用を裏付けるものであり、教師の模倣に対する認識の重要性が明らかになった。

第 4 章では、第 1 章、第 2 章で提示した合唱理論を、第 3 章で明らかになった模倣学習のメカニズムを踏まえて、実際の授業で実践していくための指導理論を構築した。これは、教師が授業実践において、これまでに論じられている合唱理論を活かした指導を行うには、指導と合唱理論を結び付けるもう一段階のコネクティブ的理論が必要であると考えたことからである。そこで独自の指導理論を展開することにした。まず合唱に必要な基礎的な能力として、聴感、相対音感、分析力、声の同期の 4 つを挙げ、その育成には、合唱体験が面白く、美しく、楽しいものであるべきであると述べた。さらに具体的な指導において、授業構成の柱となるべき理論をまとめたのが「合唱授業における指導理論」である。これは、Communication、Basic & Easily、Relation & Link、Analysis、Development の 5 項目で、合唱指導に

においてはこの5項目が常に融合、往還して行われることが重要であることを論じた。

さらに系統性のある指導体系のコダーイ・メソッドから示唆を得るために、ハンガリーの学校音楽教育におけるコダーイの教育理念、学校教育カリキュラム、指導システムを紹介し、学校現場における理論と実践の融合について論考した。

第5章では、第3章で構築した理論に基づく具体的な指導法を提示した。各指実践指導に第1章、第2章で提示したどの理論が基盤になっているのか、そして第3章で解明した模倣理論がどのように関わるのか、それらの連携と指導目的を明確にし、実践内容を示した。実践内容は第1章で提示した5つの学習項目、(1)音程感覚の育成、(2)倍音の学習、(3)聴感の育成、(4)音楽構造の分析、(5)発達段階の考慮、からそれぞれ考案し、それらの項目を実現するための具体的指導法を検証した。指導実践の内容は、授業における有効性・有用性を見るために、実際の小・中学校音楽科授業、小・中学校音楽科研修会と筆者が指導をしている少年少女合唱団で実施した。

各項目の実践内容は以下である。

1. 音程感覚の育成

(1)階名唱の導入

- ①移動ド唱法からの歌唱学習 [小学校6年生の音楽授業]
- ②身体を使った学習 [研究者と現場教員のためのワークショップ]

(2)相対音感の学習

- ①縦譜導入の授業 [中学3年生の音楽授業、小学4年生の音楽授業]
- ②和音を歌う [小・中学校音楽科教員研修会]
- ③音高を可視化する [小・中学校音楽科教員研修会、中学3年生の音楽授業]

2. 倍音の学習

(1)倍音を聴く [佐倉ジュニア合唱団での実践]

3. 聴感の育成

- (1)他声部を聴きながら歌う [小学6年生の音楽授業]
- (2)内的聴感を使う [佐倉ジュニア合唱団での実践]

4. 音楽構造の分析

(1)楽曲分析からの指導

- ①身体にリズムを入れて楽曲を歌う [中学1・2・3年生の授業]
- ②レガートの楽曲を歌う [小・中学校音楽科研修会]
- ③テーマからの発展学習 [小・中学校音楽科研修会]

5. 発達段階の考慮

(1)発声指導 [佐倉ジュニア合唱団での実践]

各実践を提示すると共に、実践の導入検証として、研修会に参加した音楽科教員へ研修後の追跡調査を行い、理論が現場実践につながるための課題等も明らかにした。

最終章の結論では、合唱理論の必要性とそれを現場実践していくための指導理論、集団における現象を踏まえた指導の重要性をまとめた。本論文の結論は、次の3点に集約できる。

- (1) 授業における合唱には、音程感覚、聴感の育成と倍音、音楽構造からの合唱を構築する学習が必要であり、それを実現するためには合唱指導理論を基にした指導が行われるべきである。
- (2) 歌唱授業では、模倣行動を起点とした相似現象が起こることが明らかとなった。そして、歌唱の相似は、声質よりもピッチ、音価、歌い出しに見ることができる。さらに声質は、調音によって、より相似傾向を増すことが可能である。指導者は、集団学習での相似現象を認識し、これらの特質を活かした合唱指導を行うべきである。
- (3) 合唱指導は、理論に裏付けされた指導であるべきで、理論に基づいた実践が、子ども達の力を伸ばし、意義ある合唱の学習の実現につながる。

合唱授業の向上には、教師の認識と合唱に対する視野の広がりがあることで実現する。今後、この研究が授業で活きるものとなるには、授業の具体的活動場面にまでのコネクトが必要である。研究と実践の接続的部分の研究が深まることで、研究と実践の往還が可能になると考える。